琉球大学学術リポジトリ

効力感を高める望ましい集団活動の育成　―「話し合い活動」の逐語記録による授業分析―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター
	公開日: 2008-11-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 黒木, 義成
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8031

効力感を高める望ましい集団活動の育成

－「話し合い活動」の逐語記録による授業分析－

黒　木　義　成*

（1994年8月31日受理）

学級活動の話し合いは、全ての教育活動の基盤になるものであるとの声がある。しかし、特別活動の特質が自治的活動の育成であることを考えた場合、話し合いの活動も自治的活動を育てようとする場合の根幹であることを強調したい。これまでの学級活動の実践では「集団活動」を意識したものは多かったが、それが果たして「望ましい集団活動」になったのかどうかは疑問である。

本研究は、「望ましい集団活動」の育成を目指して、話し合い活動に視点をおく。そしてこれまで検証できなかった子供一人一人の内面に迫り、話し合い活動後の逐語分析をもとにして検証を行うものとする。

1．はじめに

「…子供の内発的な学習意欲を喚起し、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの能力を学力の基本とする新しい学力観に立って指導を進めることが大切である。」（『新しい学力観に立つ特別活動の創造』文部省p．4）ここで注目したいのが、「子供の内発的な学習意欲」ということである。

確かに子供一人一人は、それぞれの思いをもって生活している。それは、話し合いの際にも言えることである。しかし、話し合いの特質が集団決定であるために、一人一人の思いを生かすことが十分にできないことも事実である。

学級活動における話し合いの活動は、45分の中で行われる。子供が学級生活を通して問題に気づいたり、突き当たった課題を自分たちの手で話し合い、解決する能力を身につけることは、これからの社会に生きる子供たちにとって、不可欠な資質や能力であると言える。話し合いは、限られた時間の中で、個と集団との関わりの中で集団決定をしなくてはならない。そのような意味で集団決定をする方法を学ばせる必要がある。

しかし、これまでの多くの実践をみると話し合いの内容が多すぎて、時間内で終わることができないものが多かった。終わったとしても安易な多数決に頼ってしまい、多くの場合、子供たち一人一人の気持ちを満足させられるものではなかった。

では、子供を満足させるために、一人一人の効力感を高めながら、望ましい集団活動を育てることはできないであろうか。

本研究は、望ましい集団活動の育成手段として、子供一人一人の効力感に視点をあてて、有効な手だてを導こうとするものである。

2．「望ましい集団活動」の原理・方法

特別活動の目標は「集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする」社会的な資質形成の側面と「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図る」という個人的な資質形成の側面を併せもっている。そのため特別

＊　琉球大学教育学部（附属小学校）

活動の指導においては、個人の人格の形成において社会的な資質と個性的な能力・資質との調和のとれた成長発達を統一的に実現しようとするのである。

では、望ましい人格の実現を可能にする指導原理・方法とは何であろうか。それは、「なすことによって学ぶ」という活動主義あるいは経験主義の方法である。これは、子供が自己実現の原動力として内在させている「自己活動性」の教育的評価値をおいて教育指導の基礎としているということである。従って、その活動の特徴は、自発的、自主的、実践的な集団活動としての特質をもつ。このような子供自身の自治的な集団活動を通して民主主義のものの考え方を取得させようとしている。

望ましい集団は、初めから存在しているものではなく、子供一人一人が自らの活動欲求を満たしながら、教師による支援・指導のもとで他の子供との人間的な触れ合いによる相互作用、即ち「集団における活動」を積み重ねて形成されるのである。子供にとっての「望ましい集団活動」とは、子供一人一人が自発的な活動の欲求を充足させながら、各人が内在させている能力を発揮して、しかも学級や学校における集団の生活の充実と向上に役立つ活動を仲間とともに追求しつつあるような、心理的に安定し、社会的に充足した状態を指している。

特別活動における「望ましい集団活動」には、子供一人一人の個性的な成長と社会的な発達を同時に実現するという「二重の教育機能」をもつといえる。このことから、学級活動の基本的な性格は、個人の資質や能力を引き出し、生かしながら社会的な資質を育むという二つの側面をもっていると言える。

それ故、学級活動の指導方法には、学級の集団に働きかける社会的側面と子供一人一人に働きかける個人的側面とがあるが、この指導方法はどちらも統合的な人格を形成するということになる。

学級活動の指導においては、この二つの相異なる指導原理を子供の人格の主体的で統合的な自己形成の過程に、即ち自己実現という中心軸に統一するのである。

「望ましい集団活動」の指導原理は、次の通りである。

(1) 集団に所属する成員一人一人の個性が尊重され、その相互理解・相互受容をベースにした人間関係と集団生活が築かれるようにすること。

(2) 個々の成員と集団の生活の充実を共に実現できる共同の目標を自主的に設定できるように指導すること。

(3) 集団の目標が全成員による民主的な意志決定を通して設定されると共に決定に基づき成員相互の協力によって活動が実践されるように支援すること。

(4) 個々の成員が役割を分担し、自己の責任を果たし、創意工夫して役割を果たせるように支援すること。

(5) 成員各自が自他の活動に心を配り、よりよい活動が進められるよう助言し合えるような集団の士気、意欲を培うこと。

3. 「集団活動」の特徴

レイビン、リートゥシマは、集団の実験を通して「集団の目標と目標に向かう方法を知覚すれば、個人は集団にひきつけられる傾向が増すこと」を明らかにした。そしてこれを集団所属感として、①集団の一員であるという感情、②集団の仕事と目標に関与すること、③集団に対して共感をもつことと定義した。レイビン、リートゥシマが行った「集団目標及び集団通路の明瞭性が個人や集団関係に及ぼす効果」に関する実験結果では集団所属感のこの変容は、「個人と集団との間に次のような相互関与が行われ、所属集団が準拠集団としての特質を帯びる過程で生成する」としている。

(1) 所属する成員間に意志・感情の交流などの相互作用によって相互受容の雰囲気が醸成される。

(2) 集団の問題状況の解決に全成員が自我関与することにより凝集性・一貫性が形成される。

(4) 集団の共同目標を達成するために、成員が協力し合う。

(5) 成員の(1)〜(4)の相互関与の過程を通して集団内に各成員の個人的人格を受容する指示的風土やモラールが醸成されるとともに成員各個々人には相互受容の心理に支えられた生活や学習の目標に対する意欲的な態度が形成される。

「望ましい集団活動」は、成員の集団に対する所属感を(1)〜(4)の要件を満たしながら(5)の状態まで高めていくことを期待していると考えられる。即ち「望ましい集団活動」は、相互作用、凝集性、組織と役割分担、共同目標、士気の五つの一般的な特徴をもつと考えられる。これを安易な言葉に直してみると、かかわり、まとまり、しくみ、めあて、やるきなどと表現できる。これは、子供一人一人の自発的、自治的な実践的活動によって生み出されるものにほかならない。従って、この活動は所産として、活動の主体である子供一人一人の実践的な学力・資質として、即ち実践的な態度として獲得されるのである。これこそは、子供たち一人一人の効力感を形成する素地となるものであり、自らを実現し、望ましい人格に向かわせる内発的な動機づけとなるものである。

では、学級活動の中でこの5つの特徴がどの

	特　質	実践的活動の特徴	活動の所産としての学力・資質		
望ましい集団活動の性格	相互作用 かかわり	・集団生活を充実させるために教師や友人と諸問題を相談し、話し合う。	・集団生活の充実が自己の生活の向上に結びつくことに気づく。友人や自分のよさに気づき、協力して集団生活の充実に努めようとする。	○自己開示 ○相互受容 ○協調性 ○適応力	自己の効力感の育成
	凝集性 まとまり	・集団生活の充実と自己の活動の向上に向けて、成員の意志を結集し、共同で思考する。	・成員が興味をもつ問題を自主的に解決しうる活動に関心をもつ。自主的に判断し、決定し行動する。	○共同思考 ○自主的判断 ○意志決定・実行力・忍耐	
	共同目標 めあて	・成員の個々の欲求に基づき達成すべき共同の目標を設定する。 ・成員個々が協力し合って、自己の個性・能力を発揮する。	・目標を達成するために友人や自己の活動の状況について、評価、激励、支援を行おうとする。	○自分達意識 ○向上心 ○友愛・寛容 ○自信・耐性	
	構造機能 しくみ・はたらき	・集団生活を維持・向上させるために組織を設け、成員個々が役割を分担する。	・集団生活の充実と向上に向け、自己の役割を理解し、活動の内容・方法を工夫し、協力し、責任を果たそうとする。	○役割意識 ○創意工夫の態度 ○奉仕的態度	
	集団士気 やる気	・成員個々の感情や思考・判断の拠りどころとなる集団の雰囲気・士気が醸成される。	・個人及び集団の活動における基本的な生活習慣、社会的な道徳性、善意・美醜・正邪についての感情を身につける。	○自立的な生活態度 ○道徳的情操 ○社会的適応	

〔表1〕　「望ましい集団活動の5つの特徴」

	話し合いの活動	係の活動	集会の活動	達成目標	向上目標	体験目標
相互作用	・困っていることを議題として全員で話し合う。	・朝、帰りの会で係として困っていることを発表したり助言したりする。	・同一活動をする時、援助、協力し合う。	・友達の発言をよく聞いたり自分の意志を述べる。	・友達を理解し相談に乗ろうとする。	・自分が人のため役立つ喜びを味わう。
凝集性	・意見が行きづまっても建設的な意見を述べる。	・自分たちの考えに基づいた係活動を創意、工夫してやりとげる。	・進行に不手際が起きてもアイディアを出して進めようとする。	・友達のよさを認めそれを生かす活動を考えることができる。	・自分の意見や行動を通してよりよい学級にしようとする。	・自分の発言や行動を喜んでくれる友達を発見する。
共同目標	・自分や友達が共同して取り組む課題やめあてを考え、決定する。	・全員に喜ばれる活動を創意工夫し、他にも呼びかけ活動する。	・困難が生じても助け合ってやり遂げる。	・活動の目標を考えたり、それに基づいた発言ができる。	・全員と協力して一つのことをやりとげようとする。	・協力してやりとげた成就感を味わう。
構造機能	・自分達でできる仕事を分担し、各々の特性を生かす内容を決める。	・自分の力でできる仕事を積極的に引き受ける。	・すべての子供が一役をこなし、困っている子に助言する。	・自分に合った仕事・役割を見つけ、意欲的に取り組む。	・自分を生かせる係活動を見つけようとする。	・自分の仕事に全員が喜んでくれたことをうれしく感じる。
集団士気	・判断に迷ったとき活動目標を意識して発言する。	・友達の仕事ぶりを見て自分の活動の励みとする。	・間違った行動をした時は互いに注意し合う。	・友達や自分のよいところ、間違っているとこを指摘できる。	・思いやりの気持ちで友達と接しようとする。	・友達に自分のよさをみつけてもらい、満足感を味わう。

〔表２〕　学級活動にみられる「望ましい集団活動」の具体的な諸相

ように観察できるのか。

４．「望ましい集団活動」の条件

子供たちが、学級生活に対する積極的な姿勢をもつためには、生き生きと意欲を示す活動を育てることが大切である。それは、学級目標の達成、話し合いの活動、係の活動、集会の活動からの見返りの配分が一人一人の子供たちを満足させているかどうかということにもつながる。この場合の見返りの中には、学級内の地位であるとか、みんなから得られる指示や信頼であるとか、正当な評価や賞賛などもふくまれると考える。そして「望ましい集団」を基盤にする学級にするためには、「これらの見返りを適切に配分する機能が、スムーズにはたらくような学級をつくりあげることが大切である」（杉田儀作『学級活動の展開』明治図書p. 40）

この見返りを適切に配分できるような「望ましい集団活動」の条件として

(1)　集団の成員間に心理的結合があること。

(2)　各成員の個人的欲求が充足されているこ

と。

(3) 目標について共通の理解をもっていること。

(4) 役割の分化がみられ、役割についての共通理解をもっていること。

(5) 各成員に所属感があること。

などが考えられる。これら(1)〜(5)の条件を満たすことができるような展開を学級活動の中で行えば、子供一人一人の効力感を高めることができ、それは同時に「望ましい集団」づくりにもつながると考える。

5. 話し合い活動の重視

一般に、話し合いは、教科の中における話し合いの基本となると言われている。しかし学級活動における「話し合いの活動」は、教科における話し合いとは異なり、自治的活動を育てようとする場合の根幹になるものであるということである。

自治的活動は、「集団の意志決定」をしようとする「話し合い活動」こそ、その本領があるという認識が必要である。

集団の意志決定（集団決定）は、しっかりした「個人の意志」をもとにし、学級のルールに

	事前活動	話し合い（前半）	話し合い（後半）	事後活動
子どもの思考過程	◎これまでの生活経験に基づいて自己の立場に立った見方・考え方をつくり出す段階 ○学級の諸問題に気づく ○話し合いの見通しをもつ ○学級会ノートに自分の考えをもつ ○話し合いの中心点をとらえる。	◎自分の考えを明確にする段階 ◎自分の立場と他者の立場を比較したり、理解したりして自分の立場を修正していく段階 ○個人の力で解決策を発表 ○補足、誘発、確認、葛藤を通して自己と他者と比べる。	◎全体の立場に立った見方考え方を自己の内部につくりだしていく段階 ○実践意欲が高まる。 ○集団の発展が予想できる。 ○活動目標が明確になる。	◎実践と話し合いとの違いを体験する段階 ○一致点を把握する。 ○相違点を把握する。 ○次への意欲をもつ。
教師の支援	●既有の知識を把握するための事前調査を行う。 ●学級会ノートへ記述させる。 ●議題と関わる資料提示 ●調査活動を仕組む。	●話し合い項目に対して自分の願いや要求を出させる。 ●考えの根拠を明確にさせる。 ●実践可能かどうか判断しながら助言する。 ●論点を絞り込ませる。	●一人一人の役割分担を明確にし、実践化への見通しを持たせる。 ●実践化への意欲づけを行う。 ●話し合い活動場面の評価をする。	●その場に応じた活動を行うことを助言する。 ●活動終了後に感想発表させる。

〔表3〕 「望ましい集団活動」をするための話し合いの過程

従って生み出すものである。しかもその「集団決定」は、単なる同意ではなく、全員の協力によって実践・実行しようとする「志向性」をもつものでなければならない。「同意」は、多数決の必要条件ではあるが十分条件になり得ないことは確認しておきたい。

そして自治的活動としての「話し合い活動」が高まる学級の要素として、次に示した4つが考えられる。

(1) 「やりたい」「～しよう」とかという自己表現が豊かになる。

(2) 相手への気持ちや考えがわかり連帯感が深まる。

(3) 能動的になる。

(4) 実践化への見通しがもて夢が広がる。

など活動題材に対して意欲的に関わることができる。このような意欲を発揮する授業過程の中で、集団の意志決定を行うためには、全体の立場に立った見方・考え方を自己の内部につくり出していくことが要求される。自己の内部につくり出すとは、自己と他者との間で考えの補足、誘発、確認、葛藤させながら、共感的理解を図ることである。そしてそれは同時に、社会性を豊かに育てることにも通ずることでもある。

全体の立場に立った見方・考え方を自己の内部につくり出すことができることにより、

①活動目標が明確になる。

②実践意欲が高まる。

③思いやりの気持ちが高まる。

など「望ましい集団活動」へ導かれていくことが考えられる。

6. 効力感を高めながら集団決定へ導く手だてとその事例

(1) 具体的な資料提示

子供一人一人が、話し合うための目標について共通理解をすることは、話し合いの活動中で、「望ましい集団活動」をするための根幹になる。話し合い活動は、その特徴から「集団目標」が大きなウェートを占める。しかし、集団目標にだけ重点を置かれてしまっては、それこそ子供一人一人のよさを生かすことができない。

そこで「集団目標」と同時に「個人目標」にも視点をおき、話し合いの初めに子供一人一人に自身の目標を意識させておく必要がある。

既有の知識を活性化するためにも、話し合いの柱に対して能動的になるためにも、具体的な資料を提示することが教師の支援にもつながる。

『ハワイの友だちにお便りを出そう』という議題で話し合った時、「どんな便りにするか」ということが問題になった。子供たちの意見は、「手紙」「写真」「アニメ」など予想された意見であった。なぜか？それは、子供たちの意識の中には、ハワイの友だちのイメージはあるが、ハワイのイメージがほとんど浮かんでないからである。結果は同じでも、現在のハワイでの友だちの様子を把握させることにより、おそらく子供一人一人は、夢の持てる集団決定を導き出すことが可能になると考える。

英語で書かれた手紙やハワイのエレメンタリー・スクールの様子、ワイキキビーチの絵を見せることで子供たちは、「早く、お便りを出したいな！」と意気込みも凄くなってきたのである。

(2) 討論の組織化

限られた話し合い活動の時間で質的に効果を期待するためには、話し合いの中心点をより明確にする必要がある。それは中心点が実践活動でも大きなウェイトを占めるからである。

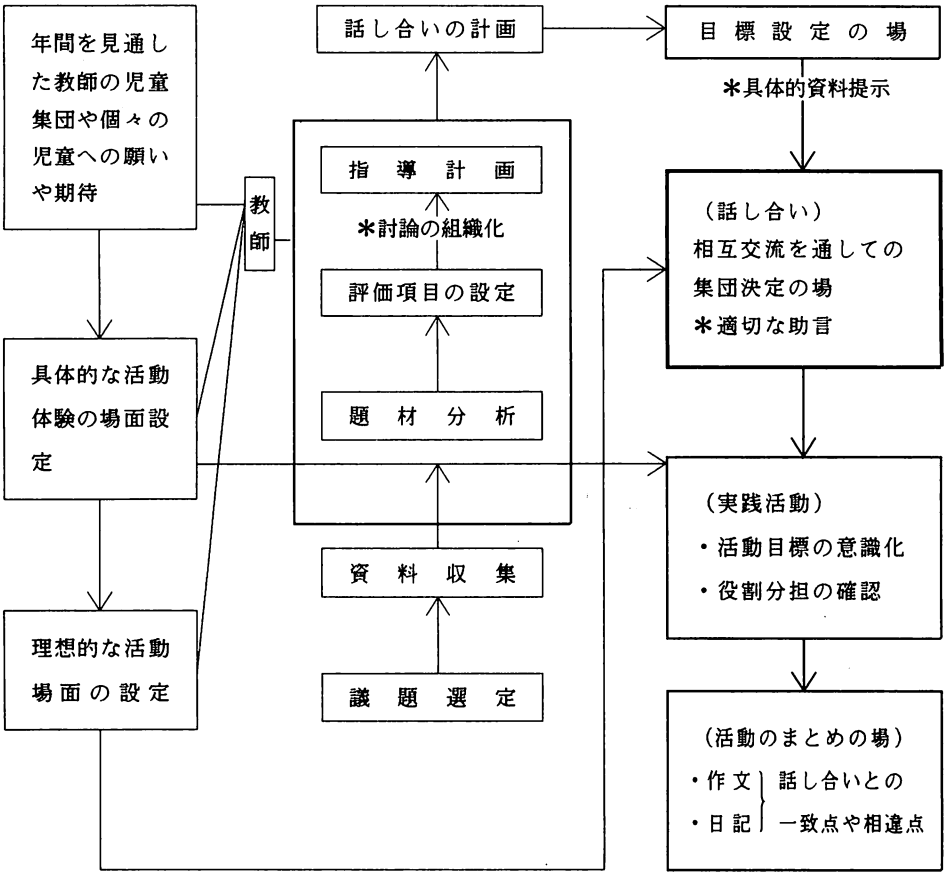
特に「全体の立場に立った見方・考え方を自己の内部につくり出していく」ことを集団決定手段と考えると、話し合いの中心点もおのずから絞り込まれてくる。

「ハワイの実践」では、「手紙」「絵本」「声の便り」の中から学級として、どのような形で送るかを話し合った。それ以外の「いつ、だれが、どのようにして」といった問題は、朝の会や帰りの会などで解決できる問題であると判断したからである。

話し合いで子供をどのように育てるかを明確にする事が大切である。

(3) 教師の適切な助言

話し合い活動の過程で最も重要な問題は、子供たちがややもすれば既成の概念や見方だけを



〔表４〕　話し合い活動の構想図

尺度として与えられた問題に対処しようとすることである。子供たちの考えは、表面的で浅い場合が多いし、判断のより所も科学的でないことも多い。そこで、教師の方から質問をしたり、全体のめあてにたちかえらせたり、新しい方向を探求させたりなどの適切な助言が重要になってくる。特に、子供一人一人が効力感のもてる集団決定にすることができるかどうかは、この助言の時間にかかっていると言っても過言ではない。

このことは、教師が話し合いの到達点を予想できているかということと大きく関係してくる。前述した「お便り活動」の中では、３つのそれぞれの意見が出て、結論にまでたどりつけなかった。そこで「もらったねタイム」の時間を利用して意見の統合化を図ったのである。一冊の本にして、その中に写真や絵でまとめていくのである。僅かな時間の確保を行い、意見の振り返りをすることで、３年生でも集団決定に導くことができたのである。

７．授業実践〈３年生の例〉

(1)　議題名　「フットベース遊びのルールをくふうしよう」

(2)　議題について

学級活動(1) は、望ましい集団活動を通して、学級活動生活の充実・向上という目的に向かって、自己と集団の活動のしかたを見直していく活動である。そしてその中で、友だちと協力してよりよい生活を築いていこうとする積極的な態度や行動ができるようになることを目ざした活動でもある。

２年生から３年生へ進級した子どもたちは、

体育の授業としては、フットベースボールの経験を全員がしており、基本的なルールは男女問わず理解されているように思われる。しかし、先日行ったフットベースボールのゲームの終了後、「上手な人だけ楽しんでいた」とか「相手のチームはインチキが多かった」など、不満の声が出てきた。また、「けるのがいや」「ボールが怖くて受けることができない」といったボールゲームでよくみられる問題にぶつかった。

3年生の子どもたちに話し合いの活動で効力感をもたせるには、児童が身近な過去をもとにした話し合いの場を持ち、話し合いの中でそこからの考えが出せるようにすることが大切であると考える。しかし、自分の意見を何でも「言いたい」時期にある子どもたちは、どうしても他の友だちの考えまでも受け入れることはなかなかしない。そこで、考えを認めてあげられるような場を教師が設定してやることが必要になると考え、本議題の設定を行った。

(3) 本時の指導

① ねらい

ア. 友だちの考えのよさに気づかせ、自分以外の考えを取り入れようという態度を育てる。

イ. フットベースボール遊びを工夫する目的を認識させ、全体の問題としてとらえることができるようにする。

② 授業仮説

ア. 問題意識を確認させるような具体的な資料提示を行えば、自分のめあてを全体のめあての中に取り入れようとするであろう。

イ. 友だちの考えを認めるような場をもてば、自分の考えと比較させながら集団決定へつなげようとするであろう。

③ 授業分析の視点について

この学級活動のねらいである互いのよさに気付かせ、自分も含めて学級全体が向上しようとしているか、そして子供一人一人が心理的なつながりがもて、意見の譲り合いや統合化をめざして話し合っているかを分析の視点とし、逐語分析を行う。

分析することによって、授業だけでは判断できないような子供一人一人の内面に踏み込み、話し合い活動の改善に努めていきたいと考える。

学習過程	教師によるはたらきかけと評価	子供の活動	子供の願い	教師の支援
事前		・議題用紙への記入 ・班での話し合い	・学級への所属意識と活動への意欲は高いか。（教師）	これまでの集会活動の様子を振り返り、どのような種目でやったのか。その時、困ったことはなかったかどうか考えてもらう。
	議題の分析 ・議題のしくみ	・議題の整理と吟味 ＊学級全体に関する問題か ＊問題の重要度、適時性はどうか。	・議題に関する成員の関心度と議題の重要度を考慮して検討してあるか。（役員）	
	指導計画 整理された議題を題材計画し、児童への共通理解を図る。	議題決定と提示 ＊議題提出の理由を明確に ＊活動計画の確認	・議題として、この時期取り上げる必然性を明らかにしたか。 ・活動計画の設定は妥当か。（学級）	「フットベースの工夫をしよう」 ・どんな工夫をすればいいか。
	指導計画 議題に関する成員の関心度の確かめと提案の明確化、中心点の予測	・アンケート調査による話合いの中心点の絞り込みを行う。	・絞り込み方は妥当か。（学級）	
	・議題への関心 希望や意見を過去の生活経験の中から	・工夫の集約法を個人が自分の過去の生活経験を生かして議題に対する意見や希望を学級会ノートにまとめる。	・スポーツ大会の成員の関心は高まるか。希望や意見をまとめる意欲がわいたか。（役員）	「目標設定」個人としてどのような方法でフットベース大会を開きたいのか個人としての考えをまとめさせる。
	・観察 ― スポーツ大会のための資料収集の様子	話合いに向けての持ち寄り活動 ＊男女がなかよくできるフットベース大会の方法	・自分の考えはスポーツ大会の集約として適しているか。	
※	・観察 （提案者） ＊声、熱意、話の間の取り方、資料の提示の仕方	・個人のめあてと全体のめあてを比べながら、話し合いの目的を持つ。	・「工夫しよう」への意欲を喚起する熱意のこもった提案であったか？	個人の目あてを意識しての全体のめあてとの比較
	・観察 ― 話し合い ＊意見の根拠を明確にしているか。	・意見の出し合いの場	・自分の考えを相手にきちんと伝えることができたか。	「意見の集約に向けて」 ＊自分の考えを伝える。 ＊論拠を明確にする。（過去経験） ＊他者の意見の論拠をしっかり把握する。
	・観察―（話し合い） ＊問題を深く問いただす質問 ＊相手の原案理解を促す質問	・質疑応答と問題点の抽出	・男女がたのしめる方法を考慮した共通理解が得られたか。	

事中

・観察 ― 話し合い
＊聞く態度
＊個人の思考のフィルターをくぐった意見発表
＊意見の絡まり合いと深め合い
＊副司会の進行状態の把握
・助言 ―タイミング
＊立場の尊重
＊立場の認め合い
＊考えの振り返り

・問題点の解明と集団決定に向けての検討

・級友の意見を謙虚に聞き合っていたか?
・話合いの中で級友の意見を聞いて自分の考えを修正するという場面があったか。
・実践活動を見通した意見の交換とねり合いがあったか?
・発言の中に、提案やめあてを意識した内容が含まれていたか?
・他者の表情をみていたか?
・多くの意見がより合わされて実践に力を与える結論が得られたか?

＊ノートへのチェック
＊マグネット磁石からの友だちの考えを知る。
＊自分と友だちの考えの共通点を理解する。
＊友だちの意見のよいところをみつけて意見を修正する。

［個人のグループの考えの拡散と深化］

・観察 ― 司会者
＊少数意見の取扱い

・集団の意志決定

・観察 ― 表情、雰囲気、実践活動の見通し、個人の意欲と集団の高まり

実践活動に向けての必要事項の確認

・学期の中に男女が全員楽しめそうだという雰囲気ができたか？

「副司会による会の振り返り」

［発表と会の様子］

・次の話し合いに向けて

＊［関心度・態度の観察］

事後

・観察 ― 活動
＊集会活動への参加態度
＊学級成員の表情
＊集団の高まり

男女仲よしフットベース大会

・話し合ったことをもとに活動が進められているか。
・学級全員が喜んで活動に参加しているか。
・活動の中で創意工夫をして活動しているか。

［事後活動］
＊話合いとのズレを自分なりに掴む
＊やってよかったという満足感
＊活動全体を通して、次への活動を意識した反省を行う。

話合いの回想と活動の振り返りをするための発表会

・作文法により活動全体の評価
＊発表会を通して活動の振り返りを行い活動の結果を把握させる。
＊話合いを想起させ、自分の考えていたことと実際に活動を終えてみての比較をさせる。

意欲

話し合いの活動逐語記録による授業分析　（C１～C53子供発言　T教師の発言）

子供の反応と活動（発言・活動）・教師の支援	発言分析・評価
T　この前の「フットベース」のビデオを見てもらいますので、ただワーワーと見るのではなくて、後で先生がビデオをみて、みなさんがどんな感想を持ったか聞いてみますので、よろしくお願いします。（ビデオ視聴）	・聴覚機器をみる視点を明確にする。
C1　ボールが多かった。	・不満を表出
C2　陽子さんがからぶりをしていた。	・問題点を意識化
T　みんなは、陽子がからぶりをした時「ワー」と笑ったけど、あのフットベースボールの後、陽子さんは、次のような感想を書いてくれています。読んでもらいましょうね。	・ビデオの問題点を明確にし、話し合いを焦点化
C3　私はフットベースをした時にいやだなあと思ったことがあります。それはボールをからぶりした時みんなに笑われたことです。蹴ってもあまりとばないので、走っても足が遅いからアウトになってみんなにおこられたことです。	・自分がやりたくない気持ちを素直に表現
T　今の日記を聞いて感じたことを発表して下さい。	・めあてへの接近発問
C4　蹴れなかったら、恥ずかしいと陽子さんは思ったと思う。	
C5　陽子さんは、からぶりをしてしまったので「いやだな」と思ったと思う。	・技術面の理解 恥ずかしさの理解
C6　二回もアウトになって、みんなにしかられてかわいそうだなあと思いました。	・同情
C7　わざとからぶりをしたんじゃないのに、みんなにおこられてかわいそうだ。	・相手の立場での思いやり
T　自分は好きなんだけど、得意でない人もいるようです。 1．受けるのが苦手　2．蹴るのが苦手　3．走るのが苦手	・問題点の提示
T　では今から、もう一度確認してみようと思います。何回手をあげてもいいですよ。 1の確認：男子（10人）　2の確認：男子（7人） 女子（12人）　女子（9人） 3の確認：男子（0人）　女子（3人） この結果からもわかるように、楽しいドッチボールですが、苦手だな思っている人もいることがわかりましたね。 今日は、このような問題を解決してみんなが楽しくドッチボールをすることができないかな、ということを頭に入れて話し合って欲しいと思います。ノートを開いて下さい。今日のめあて、みんなのめあてを確かめてみましょう。	・具体的資料を提示することで話し合いの目的を全体・個人ともに確認する。 ・意識していない子への意識化をねらう。 ・めあての確認

子供の反応と活動（発言・活動）・教師の支援	発言分析・評価
得意でない人も楽しめるルールを考えよう。	・全体のめあての確認
T　このめあての言葉で、特にみなさん、一人一人が考えていた方がよい言葉は、どんな言葉でしょうか。	・めあての焦点化
C８　得意	・技能面重視
C９　楽しめる	・情意面重視
C10　ルール	・規律重視
T　「得意でない人も楽しめるルール」ということでいいですか。自分のめあてを持ってると思いますけど、今の「得意でない人も楽しめるルール」ということを考えてめあてをつくった人は立って下さい。	・全体のめあての再確認
・考えてきた人　26名	・問題意識者
・あまり考えて来なかったけど、これから考えてみたいなと思った人　13名	・半問題意識者
自分のめあてがみんなのめあてに近づけるような話し合いにしていきましょうね。	・個人のめあてを全体のめあてに組み込む
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊	
S　司話し合いに入ります。どんな工夫をすればいいと思いますか意見を出して下さい。	
C11　蹴るのが苦手な人は、けったら少ししか飛ばないから、段ボールをおいて、そこに入ればホームランかヒットにするといいと思います。	・蹴る事が苦手な子への思いやり
C12　蹴るのが苦手な人は、二塁の後ろに段ボールを置いて、そこに入れば、ヒットになるという方法をとればいいと思います。	・蹴る事が苦手な子への思いやり
C13　走るのが苦手な人のためにベースとベースの長さを短くすればいいと思います。	・走る事が苦手な子への思いやり
C14　走るのが苦手な人のために、ベースとベースの間にもう一つベースをおけばいいと思います。	・走る事が苦手な子への思いやり
C15　ファールをなくせばいいと思います。	・全体的な配慮
C16　ピッチャーより前に出てはいけないというルールを決めればいいと思います。	・全体的な配慮
C17　ピッチャーより前に出たらアウトにするというルールを決めればいいと思います。	・全体的な配慮
C18　２塁と３塁の間の前の方に円を書いて、そこに入ればヒット	・C14に賛同

子供の反応と活動（発言・活動）・教師の支援	発言分析・評価
にすればいいと思います。	・相互作用
C19　蹴った後に、すぐに当てないで、3秒か4秒くらい待って当てるようにすればいいと思います。	・他者への思いやり
C20　三角ベースにすればいいと思います。	・学級の向上
S　今まで出た意見に質問や意見はありませんか?	
C21　ベースとベースの間は、5ｍくらいは離さないといけないと聞いたんだけど、どうですか。	・相互作用
C22　走る人のためのルールだからいいと思います。	・C13への賛同
C23　N君に質問なんですけど、ボールをゆっくりころがしても、距離が長いからだめじゃないですか。	・現実問題への対処
C24　距離が長いなら、短くすればいいんじゃないですか。	・相互作用
C25　H君に似ているんですけど、ゆっくりころがしても、足の遅い人はアウトになるから、他の人に怒られたりするかもしれないので、その時はどうなんですか?	・ビデオの回想からの疑問
C26　蹴るのが苦手な人は、ゆっくりころがしても、蹴るのが苦手なんだから、アウトになるんじゃないですか。	・問題解決の現実性
C28　だったら、蹴るのが苦手な人には合わないようなので、取り消して下さい。	・現実理想とのズリの把握
S　取り消してもいいですか?　（はい）	
C30　3秒、4秒待ってから投げると言いましたが、そうするとアウトにできないんじゃないですか。	・C19への疑問
C31　じゃ、もう少し時間を2秒くらいにしてもいいんじゃないですか。	・時間感覚の甘さ
C33　T君の言ったアウトになるまで待つと言っていましたが、アウトになるまで待ったら、アウトにならないんじゃないですか。	・苦手な人たちへの配慮の不満 ・友達の向上願望
C34　蹴るのが苦手な人は、蹴るまでやった方がいいと思います。	・凝集制性の表れ
C35（図を使って説明）ぼくの言っているのは、ボールを蹴るまで前に出てきてはいけないと言っているのです。	・共同目標を意識しての発言
C36　三角ベースに質問なんだけど、三角にしても走るのが苦手な人はすぐにアウトになるんじゃないですか。（図で説明）	
T　何か聞いておきたいことはありませんか。	・相互作用
C37　1塁とホームは近いけど、1塁と3塁が遠いと思います。	・新ルールへの不安
T　色々な意見が出ましたが、もっと自分がやってみたい方法のよいところを発表してもらえるといいと思いますよ。	・多様な考えのよさを気づかす

子供の反応と活動（発言・活動）・教師の支援	発言分析・評価
C38　段ボールを置くというのは、楽しみなことに、「入るかなあ」とドキドキすると思います。	・活動への期待感をふくらませる
C39　ファールをなくすというのは、ファールによくする人でも安心してできると思います。	・C15への賛同
C40　ベースを短くするというのは、走るのが苦手な人にはよいと思います。（塁と塁の間にベースを）	・C13への賛同
C41　丸をかくということのよい所なんだけど、そこに入ればアウトにならないからみんなも楽しめると思います。	・C18への賛同 全体の配慮意見
C42　4アウト、5アウトのいいところなんだけど、このやり方でやると蹴るのが苦手な人でも塁に出られるかもしれないし、アウトになっておこられていた人もおこられなくていいと思います。	・学級全体の雰囲気を考えた意見
C43　1塁2塁の間にベースを置いたら走る人も距離が短いから楽しんでできると思います。	・C14への賛同
T　自分の考え以外にも色々な意見が出ましたね。そこでこれまでの意見を聞いて、「この意見もらったね」というのがありましたらノートの下の方にまとめて下さい。 ・めあてに近くなるかな？ ・どの方法でやると楽しめるかな？　では、どうぞ。	・よさの認め合いへの賞賛と集団決定に向けての助言 ・視点の明確化
T　これまで出た意見で自分が取り入れてみたいなと思ったものがあれば発表してみて下さい。	
C44　ファールをなくす。	・全体配慮
C45　段ボールを置くと丸をかく。	・新しいルール
C46　ベースを短くする。	・走る事への配慮
C47　ドキドキできる。	・感情の同意
C48　ファールをなくす。	・全体配慮
C49　丸をかく。	・新しいルール
T　色々意見をもらったようですが、意見を整理してみましょう。	
A子（蹴る・走る）塁と塁の間に丸を書いてそこに入ればヒット U子・M子（蹴る）段ボールを置き、入ればホームラン。 Y男（蹴る）ファールをなくす。　T男（走る）塁と塁の間にベースをもう一個置く。　Y男4アウトにする（蹴る・走る）	・出された意見がどのようなものかを明確に示す

子供の反応と活動（発言・活動）・教師の支援	発言分析・評価
T　今まで出た意見の仲間分けをみんなでしてみましょうね。 ・４アウト、ファールをなくす、ベースの間を短く、蹴れるまで、アウトにならない。 ・ラッキーゾーン　・ベースとベースの間にベースを置く。	・発言した子、しなかった子にも参加意識を持たせている。 ・ルール改正 ・新しいルール
T　みなさんが、考えてくれた新しい「フットベースボール」、なんだかわくわくしてきますね。みなさん、どうですか？　この仲間分けしたようなことを考えて、３年３組だけのフットベースボール大会をやってみましょうか？	・集団決定を教師とともに行う。
C50　先生、面白そうなフットベースボールだけど、名前をつけるともっとかっこいいんじゃないですか？	・活動意欲の表れ
C51　賛成、私も名前をつけた方がいいと思います。	・C50への賛同
T　みなさん、名前をつけたらいいという意見ですが、どうしますか？（多くの拍手）	
C52　ぼくは、新フットベースがいいと思います。	・活動意欲
C53　私は、それもいいと思うけど３年３組の名前から「サンサンベースボール」がいいんじゃないかと思いますけど、どうですか？	・学級の向上を願った発言
C54　なんとなくかっこいいし、運動場は太陽がまぶしいから、それでいいと思います。	
T　話し合いは、これで終わりますが、「サンサンベースボール」が全員で楽しめるように頑張りましょうね。	・活動への意欲づけ
S　最後に副司会さんから今日の話し合いの感想をまとめてもらいます。よろしくお願いします。	
ＶＳ　今日の話し合いは、今までのフットベースを工夫して全員が楽しめるものにしようということでした。みんなが色々な意見を出してくれて、聞いていてわくわくしてきました。 「サンサンベースボール」が３年３組全員でできるということなので、楽しみにしていたいと思います。	・話し合いの振り返りと活動への決意

8. 考　察

話し合い活動における子供、教師の発言をそれぞれ分析した結果、

- 自分の得意でないものを何らかの形で克服した。
- できる子は、苦手な子の立場でそれぞれの意見に賛成する。
- 助け合って学級全員が楽しみたい。
- 活動への意欲
- 集団生活の向上

等の発言が出され、本研究の目的である「望ましい集団活動」への第一歩につながることができたようである。それは、同時に「フットベースボール」という日頃、慣れ親しんでいるスポーツだからこそ達成可能なのかもしれない。

発言を振り返ると常に、苦手な子への配慮が伺える。少なくとも、それらの子供たちは、発言してもしなくても「なんとかやれそうだな」という効力感をもつことができたことであろう。

これらの発言は、いずれも発言分析表でも明らかなように、自発的発言であり、集団の指向性においては相互性が高く、子供同志の関わりの深さがみられる。

また、教師の発言を分析すると、

- 仲のよいクラスを意識した発言に対する評価
- 自分を理解し、苦手を克服しようとする子への賞賛
- 自己実現への意欲
- 困っている人への援助に対する賞賛
- 集団決定方法に関する助言
- 実践活動への激励

等の発言があり、個人や全体に対する支援、助言的な発言がみられた。

また、子供への評価として、向上目標、体験目標に視点をあてた評価がなされている事が分かる。授業全体の記録でもわかるように子供の発言は53回という比較的多い発言であり、望ましい集団の中で、子供が生き生きと話し合いの活動を行っている。

このような方法を用いて子供、教師発言を分析し、「関心・意欲・態度」の現れを分析することは、子供一人一人に効力感を感じとらせ、「望ましい集団活動」の育成を目指す上で大変有効であった。

最後に本研究の成果と課題をまとめてみる。

9. 成果と課題

(1) 成　果

① 「望ましい集団活動」を育成する手段として、学級活動の話し合い活動に視点を当てたが、自治的活動をその基本として、取り組めば、最も有効な手だてであることがわかった。

② 子供一人一人の効力感を高める工夫をして、話し合い活動を三つの視点で分析したことは、一つのきっかけをつくることができた。

③ 子供一人一人の内面に少しでも迫る意味で、逐語分析を試みたが、授業では判断できないような思考を子供が行っていることがわかった。

逐語分析は、視点をきちんと決めて分析していくと考えていること以上の内面を見ることができる。

④ 話し合いは、事前の中心点を明確に絞り込めば、1時間に1本の柱で討議すると「心理的なつながり」も強まり、集団の所属感もでてくる。

(2) 課　題

① 特別活動は、「学級活動」「児童会活動」「クラブ活動」「学校行事」で成り立っているが、「望ましい集団活動」の育成を「学級活動の話し合い活動」だけの視点で分析するだけでは十分でない。

② 子供一人一人の効力感を高めるためには、子供を授業に参加させる工夫が必要十分条件になるが、発言をあまりしない子供たちの内面にどのように迫ればよいのか更に考慮してみなくてはいけない。

③ 年間指導計画のもとで計画をねる際、「望ましい集団活動」の姿をきちんとイメー

ジ化しておく必要があると感じた。

④　司会団の指導が、話し合い活動では大きなウェートを占めるために、日頃からその指導を輪番を原則にしておく必要があると感じた。

〈参考文献〉

○　文 部 省　『新しい学力観に立つ特別活動の創造』　1993年

○　成田國英　『特別活動とはなんだろう』　文渓堂　1992年

○　杉田儀作　『新しい学力観に立つ学級活動の展開』　明治図書　1993年

○　波多野誼余夫・稲垣佳代子　『無気力の心理学』　中公新書　昭和56年

○　宇留田敬一　『集団活動の理論と方法』　明治図書　第5版　1978年

○　「活動内容の特質を生かし、相互の関連を重視した学級活動の指導と評価」　東京都立研究所　教科研究部　特別活動研究室　1992年

○　琉球大学附属小学校　「特別活動における自ら学びとる力の指導」『研究紀要第6集』　1989年